

社会対話「環境カフェ」の実践
 —「環境カフェ本郷」の開催を例に—
 Practice of social dialogue “Kankyo Café”
 As an example of holding “Kankyo Café Hongo”

多田 満

TADA Mitsuru

国立研究開発法人 国立環境研究所

[要約] 専門家（研究者）と市民（高校生以上）による社会対話「環境カフェ」を2015年度より開催している。そのうち東京大学本郷キャンパス内で2016年度に開催（5回）した「環境カフェ本郷」では、自然共生と生物多様性のかかわり、「センス・オブ・ワンダー」（R. カーソン）、環境研究の「自然」「社会」「生命」とのかかわり、カーソンの『沈黙の春』と「土地倫理」（A. レオポルド）をもとに「生命と環境」の倫理、環境の「自然」「社会」「文化」とのかかわりをそれぞれテーマに開催した。開催後のアンケートの結果、理解と共感（各3段階）について「できた」の回答が、各回の参加者全体の平均で68%（30～100%）と58%（30～67%）、「ある程度できた」が32%（0～40%）と42%（33～70%）で、「できなかった」はすべて0%であった。また、高校生（のべ12人）、大学生（16人）、社会人（2人）の理解については、「できた」と「ある程度できた」の回答が、それぞれ75, 56, 0%と25, 44, 100%、共感については、それぞれ67, 50, 0%と33, 50, 100%であった。理解と共感の度合いはそれぞれ高校生でもっとも高かった。

[キーワード] 環境カフェ, 共感, 社会対話, センス・オブ・ワンダー, 『沈黙の春』

1. はじめに

2011年3月11日の東日本大震災と福島第一原発事故をきっかけに、日本学術会議は、声明「科学者の行動規範」の改定（日本学術会議2013）をおこない、科学者は「市民との対話と交流に積極的に参加すること」（社会対話の実践）、すなわち「社会に向き合う科学」が取り上げられ、科学技術の限界や不確実性を踏まえた「社会への発信と対話」が重視された。このような社会状況のなかで社会対話の実践の一つとして「環境カフェ」（多田2016）を2015年度より開催している。それは大学内や公共のカフェなど日常の生活の場において、専門家（研究者）と市民（高校生以上）が気軽な雰囲気、環境（研究）に関連するテーマを取り上げて、少人数（4～8人）の対話による「共感の場」を作ろうとする試みである。

2015年4月から月1～3回の頻度で、2015年度は東京（日比谷公園や代官山、秋葉原など）やつくば、横浜、千葉、札幌、京都、大阪など各地の公共のカフェや大学キャンパス

内で、2016年度はおもに大学内（東京大、京大、早稲田大など）で合計34回、述べ189人（平均5.6人/回）の参加により開催した。

本報では、それらのうち「環境カフェ本郷」（2016年度に5回の開催）について、そこで取り上げたテーマや「問いかけ」と開催報告、ならびに理解と共感（それぞれ3段階）に関するアンケート結果について報告する。

表1 「環境カフェ本郷」で取り上げたテーマと「問いかけ」(類型)

回	開催月日	開催人数	テーマ	「問いかけ」(類型)
1	2016年 10月8日	6	「自然共生を考える」—生物多様性とのかかわり	生物や自然とのふれあい(子ども・大人)
2	11月19日	7	「環境」を考える—センス・オブ・ワンダーとともに	地球に生きていると実感するもの・こと(自然・社会・文化)
3	12月10日	6+6 (2回)	環境研究—自然と社会と生命(人)のかかわり	興味や関心のあるもの・こと(自然・社会・生命)
4	2017年 1月21日	4	「生命と環境」の倫理—生物, 人間, 環境	生命・環境(同左)
5	3月4日	7	地球の未来—「環境を考える」3	環境(自然・社会・文化), 文化・文明(同左)

注) 開催人数には参加者の人数と多田が含まれる。

表2 「環境カフェ本郷」の開催報告

回	開催報告
1	赤門そばの赤門総合研究棟1階ラウンジスペースで東大生と高校生それぞれ2名, 芸術家1名の6名で開催しました。自然共生(人と自然の共生: harmonious co-existence between nature and mankind)と生物多様性(生きものの力), それに支えられた生態系サービスについて「学び」「考える」とともに「センス・オブ・ワンダー」(人間)と生物多様性のつながりから, 生物多様性保全の必要性に結びつけました。そのための「自然や生命とのふれあい経験」を参加者のみなさんに付箋紙に書いていただき, とともに「聴き合い」しました(経験の向上)。
2	まず, 「地球に生きていると実感するもの・こと(体験)」の問いからはじめて, それと「美」のつながりを南原実とリチャード・ジェフリーズの言葉から考察しました。つぎに神秘から美へのつながりをセンス・オブ・ワンダー(=神秘さや不思議さに目を見はる感性)から理解しました。また, 「環境」を「自然」「社会」「文化」に分けてそれぞれの体験とのかかわりをみましました。最後に「ヒト」「人間」「人類」「人」の違いを考察しました。
3	環境研究は「自然と社会と生命(人)のかかわりの理解に基づいた研究」(国環研・憲章)とされます。まず, みなさんに「興味や関心のあるもの・こと」について付箋紙に書いていただき, それと「自然」「社会」「生命」のかかわりについて考えました。その後, みなさんで聴き合ってそれら環境研究とのつながりについて考えました。さらに科学と芸術について考察し, 環境芸術の作家の方に「バイオ炭」の「自然」「社会」「生命」のかかわりについて話していただきました。環境基本計画に示された「低炭素」「循環」「自然共生」社会と「バイオ炭」のかかわりについてみていきました(脱炭素についての新聞記事も紹介しました)。最後に環境研究のデザインについて, 環境カフェを通じた環境科学と環境芸術, それらと環境教育のつながりをみましました。
4	はじめにカーソンの『沈黙の春』のなかの言説を紹介してから「生命」「環境」からイメージされる言葉を聴き合いました。その後, カーソンと『沈黙の春』にふれて, 学問(目的: ソクラテス)—思想—倫理のつながりを検討しました。つぎに「生命と環境」の倫理(地球倫理)のなかの生物倫理と人間倫理について「生命」と「物質」から遺伝子組換え(ゲノム編集)と原発の核のゴミを例にみていきました。科学文明の「科学的」にもふれ, さらに環境倫理では, レオポルドの「土地倫理」の「個人から生態系全体との一体感」について食事を例に考えました。最後に「宇宙船地球号」で知られるフラワーの環境と宇宙と私の関係を紹介しました。今回は学生と高校生合わせて4名での開催でしたが, 充実した対話の場(共感の場)になりました。
5	まず, 「環境」についてイメージされる言葉を聴き合い「自然」「社会」「文化」とのかかわりから整理して理解を深めました。「環境を考える」人について「ヒト」「人間」「人類」から「人」を考察し, 人間をイメージしたデザインを2つ提案しました。一方, 「文化」「文明」についてイメージされる言葉を聴き合い, 「文化」と「文明」の対比をおこなって理解を深めました。さらに環境問題のかかわりから田中正造のいう「真の文明」について考えました。

注) 環境カフェのFacebookに掲載した内容の一部修正をおこなった。

2. 「環境カフェ本郷」の開催

表1に示すように2016年10月から2017年3月にかけて計5回(参加人数はのべ25人,うち高校生12人,大学生16人,社会人2人),東京大学本郷キャンパス内の赤門総合研究棟1階ラウンジスペースで環境カフェを開催した。なお,第3回は参加人数(10人)が多くなり2回に分けて開催した。

はじめに環境研究に関連するテーマに基づく「問いかけ」(表1)に対して,キーワードを書いて,それらをいくつかの類型に分けてお互いに聴き合うことで理解と共感につなげた。毎回の終了時には各人にアンケートを取り,その後に環境カフェのFacebookに掲載報告(表2)を掲載した。アンケート内容に関しては,「理解の度合い」(「できた」「ある程度できた」「できなかった」の3段階)とその「理解できた点」(自由記載),ならびに「共感の度合い」(「理解の度合い」と同様に3段階)とその「共感できた点」(自由記載)についてそれぞれアンケートを実施した。

3. 「環境カフェ本郷」のテーマと「問いかけ」(類型)

「環境カフェ本郷」(5回)で取り上げたテーマと「問いかけ」(類型)を表1に示した。第1回は,自然共生(人と自然の共生)についての理解を深めるために生物多様性のかかわりについて「生物や自然とのふれあい」を「問いかけ」に参加者の経験(子ども・大人)を聴き合って相互に理解と共感をえられた(次節のアンケート結果より)。

第2回は,R.カーソン『センス・オブ・ワンダー(*The Sense of Wonder*, 1965)』(カーソン 1996)の言説である「鳥の渡り,潮の満ち干,春を待つ固い蕾のなかには,それ自体の美しさと同時に,象徴的な美と神秘がかくされています。……かぎりなくわたしたちをいやしてくれるなにかがあるのです」をもとに,「センス・オブ・ワンダー」をテーマに取り上げた。それはまた,「人のもつ最も

美しく深遠なものは神秘的なナゾへの感覚」

(A.アインシュタインの言葉)でもある。

さらに「地球に生きていると実感するもの・こと(体験)」を「問いかけ」に参加者の経験を聴き合って「美は,欲,疑い,関心,理屈にとらわれず,それはどうなっているのか,それにはどんな意味があるのか,何の役に立つのか,いかにあるべきかの問いを起こさせない。これらの問いを無効にする」(南原 2005)と「……われわれは,美しさに心を奪われている時にのみ,真に生きているのだ。他のすべては幻想であり,忍耐に過ぎない」(ジェフリーズ 1939)の言説をもとに「美」とのつながりについて理解と共感をえられた(次節のアンケート結果より)。

第3回は,自然と社会と生命(人)のかかわり理解に基づく研究とされる環境研究(国立環境研究所 憲章)をテーマに取り上げ,それぞれの「興味や関心のあるもの・こと」を「問いかけ」に「自然」「社会」「生命」のかかわりについて理解を深め,環境研究につながることに共感をえられた(次節のアンケート結果より)。

第4回は,カーソンの『沈黙の春(*Silent Spring*, 1962)』やA.レオポルドの『土地倫理』(レオポルド 1997)からの言説をもとに「生命」と「環境」について聴き合い,「生命と環境」の倫理を生物倫理,人間倫理,ならびに環境倫理に分けて,それらの理解を深めるとともに共感をえられた(次節のアンケート結果より)。

第5回は,基本的なテーマとして「環境」そのものの理解を深めることを目的におこなった。「環境」についてイメージされる言葉を聴き合い「自然」「社会」「文化」とのかかわりから整理して理解を深めた。さらに日本文化と科学文明の対比から環境問題とのかかわりについて理解と共感をえられた(次節のアンケート結果より)。

4. 「環境カフェ本郷」のアンケート結果

参加者は毎回、開催後に理解と共感の度合いについて、3段階(できた、ある程度できた、できなかった)で評価し、「理解できた点」「共感できた点」について記述をおこなった。その結果、理解と共感について「できた」の回答が各回の参加者全体の平均で68% (30~100%)と58% (30~67%)、「ある程度できた」が32% (0~40%)と42% (33~70%)で、「できなかった」はすべて0%であった。また、高校生(のべ12人)、大学生(16人)、社会人(2人)の理解については、「できた」と「ある程度できた」の回答が、それぞれ75, 56, 0%と25, 44, 100%、共感については、それぞれ67, 50, 0%と33, 50, 100%であった。理解と共感の度合いはそれぞれ高校生でもっとも高かった。

「理解できた点」「共感できた点」の回答では、多くの場合、各回の内容に沿って理解と共感できた点についてそれぞれ詳しく記述されていた。

5. おわりに

これまで「環境カフェ」は、専門家(研究者)主体で開催してきたが、それだけでなく、高校生と社会人をつなげる位置にいる大学生や院生の主体での地域における開催が望まれる。それにより地域コミュニティにおける環境問題をはじめとする社会課題の解決に向けた社会対話の実践につながるものと考えられる。なお、2017年度から開設された「九州大学環境コミュニケーションサークル」(代表: 田中迅・同大学21世紀プログラム1年)では、大学生主体による「九大環境カフェ」の開催とともに勉強会なども実施されており、今後のサークル活動の展開が期待される。

謝辞

2016年1月以降「環境カフェ」に参加している田中迅(前述)氏には、原稿の細部にわたり適切なコメントをいただきお礼申し上げます。「環境カフェ本郷」に参加ならびにアン

ケートに協力してくださった鬼頭健介、鈴嶋克大、遠峰雅士(以上、東京大学)、則武桃美(慶應義塾大学)の諸氏をはじめ大学生と高校生、社会人すべての皆さまに感謝申し上げます。

参考文献

- カーソン・レイチェル, 青樹築一訳, 1974, 『沈黙の春』, 新潮社(新潮文庫), 東京, 400pp.
- カーソン・レイチェル, 上遠恵子訳, 1996, 『センス・オブ・ワンダー』, 東京, 新潮社, 64pp.
- 平川秀幸, 2010, 『科学は誰のものか—社会の側から問い直す』, NHK出版(生活人新書), 東京, 256pp.
- 平田光司, 2003, 科学における社会リテラシーとは. 科学における社会リテラシー1(総合研究大学院大学), 3-4.
- ジェフリーズ・リチャード, 寿岳しづ訳, 1939, 『わが心の記』, 岩波書店(岩波文庫), 東京, 144pp.
- 国立研究開発法人 国立環境研究所 憲章, <http://www.nies.go.jp/gaiyo/ken-kensyo.html> (accessed 2017-9-20).
- レオポルド・アルド, 新島義昭訳, 1997, 『野生のうたが聞こえる』, 講談社(講談社学術文庫), 東京, 384pp.
- 南原実, 2005, 『未来を生きる君たちへ』, 新思索社, 東京, 152pp.
- 日本学術会議, 2013, 声明 科学者の行動規範—改訂版—, <http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-22-s168-1.pdf#search=%27科学者の行動規範%27> (accessed 2017-9-20).
- 多田満, 2016, 「環境カフェ」—社会コミュニケーションの実践. ASLE-Jpn. Newslett., 40: 4.